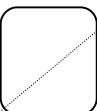


ごんぎつね ①

名前



「ごんぎつね」を読みながら、ことばのきまりを勉強しましょう。

①から⑤までのひらがなからえらんで、へくのなかに入れながら読んでみましょう。

【例】

これは、私が小さいときに、村の茂平もへいというおじいさんへからくきいたお話です。
 むかしへはく、私たちの村へくちかくの、中山というところへく小さなお城へくあつて、中山さまというおとのさまが、おられたそうです。

- ①が
- ②に
- ③の
- ④から
- ⑤は

【一】

その中山から、少しはなれた山の中へく、「ごん狐ごんきつね」という狐きつねがいました。ごんへく、一人ひとりぼっちの小狐こきつねで、しだのいっばいしげった森の中に穴あなへくほって住んでいました。そして、夜へく昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。はたけへく入って芋いもをほりちらしたり、菜種なたねがらの、ほしてあるのへ火をつけたり、百姓家ひやくしやうがの裏手うらてにつるしてあるとんがらしをむしりとって、いたり、いろんなことをしました。

- ①を
- ②に
- ③へ
- ④は
- ⑤でも

【二】

ある秋へくことでした。二、三日雨へくふりつづいたその間、あいたごんは、外へく出られなくて穴の中へくしゃがんでいました。

雨があがると、ごんは、ほっとして穴からはい出ました。空へくからっと晴れていて、百舌鳥もずの声がきんきん、ひびいていました。

- ①へも ②は ③の ④に ⑤が

【三】

ごんは、村の小川の堤つみへく出て来ました。あたりの、すすきの穂へく、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少ないのですが、三日もの雨で、水が、どっとましていました。ただのときは水へくつかることのない、川べりのすすきへく、萩はぎの株かぶが、黄いろくにこった水に横だおしになって、もまれています。ごんは川下かわしもの方へと、ぬかるみみちへく歩いていきました。

- ①を ②まで ③と ④や ⑤には

【四】

ふと見ると、川の中に人へくいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうっと草の深いところへく歩きよって、そこからじつとのぞいてみました。「兵十だな」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒いきものへくまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、網をゆすぶっていました。はちまきをした顔へく横うちようへく、まるい萩の葉が一まい、大きな黒子みたいにへばりついていました。

- ①へ
- ②に
- ③の
- ④が
- ⑤を

【五】

しばらくすると、兵十は、はりきり網の一ばんうしろへく、袋のようになったところへく、水の中からもちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさった木ぎれなどへく、ごちやごちやはいっていました。でもところどころ、白いものがきらきら光っています。それは、ふというなぎの腹へく、大きなきすの腹でした。兵十は、びくの中へく、そのうなぎやきすを、ごみと一しよにぶちごみましました。そして、また、袋の口をしばって、水の中へ入れました。

- ①が
- ②や
- ③を
- ④へ
- ⑤の

【六】

兵十はそれから、びくをもって川へく上りびくを土手において、何をさがしにへく、川上の方へかけていきました。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中からとび出して、びくのそばへくかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなつたのです。ごんはびくの中の魚へくつかみ出しては、はりきり網のかかっているところより下手の川の中を目がけて、ぼんぼんなげこみました。どの魚へく、「とぼん」と音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。

- ①を
- ②も
- ③か
- ④へ
- ⑤から

【七】

一ばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたへく、何しろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんはじれなくなって、頭をびくの中へくつつこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュツと言ってごんの首へくまきつきました。そのとたんに兵十が、向うから、

「うわあぬすと狐め」と、どなりたてました。ごんは、びっくりしてとびあがりました。うなぎへくふりすててにげようと思いました。うなぎへく、ごんの首にまきついたままはなれません。ごんはそのまま横つとびにとび出して一しようにんめいに、にげていきました。

- ①は
- ②が
- ③に
- ④を
- ⑤へ

【八】

ほら穴の近くへへ、はんの木の下へへふりかえって見ましたが、兵十ひょうじゅうは追っかけては来ませんでした。

ごんへへ、ほっとして、うなぎの頭へへかみくだき、やっとはずして穴のそとの、草の葉の上へへのせておきました。

- ①の ②を ③に ④で ⑤は

答え

【一】

その中山から、少しはなれた山の中へ、**「ごんぎつね」**という狐がいました。ごんへは、一人ぼっちの小狐で、しだのいっばいしげった森の中に穴へ、ほって住んでいました。そして、夜へでも、昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。はたけへ入って芋をほりちらしたり、菜種がらの、ほしてあるのへ火をつけたり、百姓家の裏手につるしてあるとんがらしをむしりとって、いたり、いろんなことをしました。

- ①を ②に ③へ ④は ⑤でも

【二】

ある秋へのことでした。二、三日雨へが、ふりつづいたその間、ごんは、外へも出られなくて穴の中へ、しゃがんでいました。

雨があがると、ごんは、ほっとして穴からはい出ました。空へからっと晴れていて、百舌鳥の声がきんきん、ひびいていました。

- ①へも ②は ③の ④に ⑤が

【三】

ごんは、村の小川の堤へまで出て来ました。あたりの、すすきの穂へには、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少ないのですが、三日もの雨で、水が、どっとましていました。ただのときは水へつかることのない、川べりのすすきへ、萩の株が、黄いろくに、ごった水に横だおしになって、もまれています。

ごんは川下の方へと、ぬかるみみちへを歩いていきました。

- ①を ②まで ③に ④や ⑤には

【四】

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうつと草の深いところへ歩きよって、そこからじっとのぞいてみました。

「兵十だな」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒いきものをまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、綱をゆすぶっていました。はちまきをした顔の横っちょように、まるい萩の葉が一まい、大きな黒子みたいにへばりついていました。

- ①へ ②に ③の ④が ⑤を

【五】

しばらくすると、兵十は、はりきり綱の一ばんうしろへ、袋のようになったところへを、水の中からもちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさった木ぎれなどへが、ごちやごちやはいつていましたが、でもところどころ、白いものがきらきら光っています。それは、ふとというなぎの腹へや、大きなきすの腹でした。兵十は、びくの中へへ、そのうなぎやきすを、ごみと一しよにぶちごみましました。そして、また、袋の口をしばって、水の中へ入れました。

- ①が ②や ③を ④へ ⑤の

【六】

兵十はそれから、びくをもって川へから上りびくを土手において、何をさ

がしに(か)、川上の方へかけていきました。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中からとび出して、びくのをば(かけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなつたのです。ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はりきり綱のかかっているところより下手の川の中を目がけて、ぼんぼんなげこみました。どの魚(も)、「とぼん」と音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。

- ①を
- ②も
- ③か
- ④へ
- ⑤から

【七】

一ばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりました(が)、何しろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんはじれなくなって、頭をびくの中(につっこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュツと言ってごんの首(へまきつきました。そのとたんに兵十が、向うから、

「うわあぬすと狐め」と、どなりたてました。ごんは、びっくりしてとびあがりました。うなぎ(を)ふりすててにげようしましたが、うなぎ(は)ごんの首にまきついたままはなれません。ごんはそのまま横(つとびにとび出して一しようけんめいに、にげていきました。

- ①は
- ②が
- ③に
- ④を
- ⑤へ

【八】

ほら穴の近く(の)、はんの木の下(で)ふりかえって見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごん(は)、ほつとして、うなぎの頭(を)かみくだき、やっとはずして穴のそとの、草の葉の上(に)のせておきました。

- ①の
- ②を
- ③に
- ④で
- ⑤は